

八月の猛暑が容赦なく照りつける午後。森川紡先生のマンションの一室は、エアコンが効いているはずなのに、二人の吐息と体熱で蒸し風呂のようにむっとしていた。カーテンを閉め切り、外の蝉の声が遠くに聞こえるだけ。部屋の中は、すでに汗の塩辛い匂いと甘酸っぱい体臭が混ざり合い、濃厚な雰囲気醸し出していた。

高校二年生の内村莉音は、ラクロス部の午後練習を「急な体調不良」という嘘で抜け出して、ここにやって来た。日焼けした小麦色の肌が、健康的で艶やかだ。学校から持ち出したラクロスのユニフォーム姿のまま、タンクトップ型のトップスと短いスカートパンツが汗で体に張りついている。身長154センチの小柄な体は、部活で鍛えられた引き締まった筋肉と柔らかい曲線が絶妙に混ざり、可愛らしい顔立ちと相まって、男を強く誘う魅力に満ちていた。

森川紡先生は、莉音の担任で地理担当の28歳独身教師。普段の授業では穏やかで真面目な印象を与えるが、莉音だけが知るその本性は、汗、体臭、体液すべてに異常な執着を持つ極端など変態だった。莉音もまた、同じくど変態。互いのフェティッシュを共有し、セフレ関係になってから、休暇のたびにこうした密会を重ねていた。

「先生、遅いわよ。私、練習抜け出して来たんだから、早く来てよ」

莉音はソファに腰掛け、汗で濡れたユニフォーム姿のまま足を組んで先生を睨むように見上げた。練習の途中で抜け出し、シャワーも浴びずに直行したので、ユニフォームは汗でびしょりと重く、体にぴったりと張りついている。額から首筋、胸元、そして特に脇の下まで、汗の粒が光り、布地が湿って透け気味だ。

紡先生はドアを閉め、ネクタイを緩めながら息を荒げた。

「ごめん、莉音.....でも、君のそのユニフォーム姿.....練習抜け出してそのまま来たんだろ？ 匂いがもう部屋中に広がってる.....はああ、たまらない.....」

先生は膝をつき、莉音の足元に這うように近づいた。日焼けした太もものに鼻を寄せ、深く息を吸い込む。次に、莉音の腕を優しく上げさせ、ユニフォームの袖口から覗く脇の下に顔を埋めた。

莉音の脇は、練習の激しい動きでたっぷりと汗をかき、湿った空気がこもっていた。肌は日焼けで小麦色に輝き、滑らかで柔らかい質感なの

に、汗で少しねっとり指に吸い付くような感触。剃り残しの短い毛が、数本ちらほらと黒く残り、汗の滴を絡めて光っている。それがまた、野生的なエロティシズムを加えていた。

先生は鼻を押し当て、深く深く吸い込んだ。匂いは強烈だった。塩辛い汗のベースに、女の子の体臭が混ざり、少し酸っぱく甘いニュアンス。ラクロスの激しい動きで発酵したような、濃密でむせ返るような香りが鼻腔を直撃する。

「莉音の脇.....この匂い、最高だ.....汗がたっぷり、剃り残しの毛に絡まって、もっと濃くなってる.....滑らかな肌なのに、汗でねっとりして.....はあっ、頭がぼーっとする.....」

莉音はくすくす笑い、先生の頭を撫でながら、もう片方の腕も上げて脇を見せつけた。

「ふふ、先生、脇フェチだもんね。剃るの忘れちゃったけど、剃り残しがある方が興奮するんでしょ？ ほら、もっと嗅いで。舐めてもいいよ」